

国際日本学研究科
修士学位請求論文 論文要旨

〔論文題名〕

少年漫画誌における「ラブコメ」ジャンルの形成過程について

国際日本学研究科
国際日本学専攻 博士前期課程
ポップカルチャー研究領域

入学年度	2023
学生番号	4911231003
氏名	陳希鳴
指導教員	森川嘉一郎
提出日	2025 年 1 月 9 日

超人的なヒーローの活躍や、SFやファンタジーの世界観を魅力の柱にした漫画は、日本以外の国々で作られる漫画においても分厚いジャンルを成している。また、映画等に目を転ずれば、「ロマンティック・コメディ」が、一般向けもしくは女性向けのジャンルとして成立してきた。そうした中、日本の漫画に特徴的なジャンルの一つとなっているのが、少年を主たる対象とする「ラブコメ」である。

本研究は、1970年代後半から1980年代にかけての少年漫画誌におけるラブコメのジャンルとしての成立にいたる経過と経緯を、誌面の調査とともに、当時の編集者や漫画家へのインタビューを通じて明らかにすることを目的とするものである。

経緯の追究に先立ち、少年漫画誌におけるラブコメ要素を持った作品の発生の経過について、時期的な範囲を含めて見通しを立てるべく、『週刊少年ジャンプ』『週刊少年マガジン』『週刊少年サンデー』の掲載各作品の扉ページなどに記された作品内容をアピールするアオリ文句を対象に、予備的な調査を行った。その結果、「愛」「学園」「青春」などの恋愛やラブコメ諸要素と重なる語を含むアオリ文句が1973年より少しずつ現れ始め、1977年から目立って増加していたことがわかった。

この予備調査の結果や先行研究を踏まえ、下記の仮説を立てた。

- ① 日本の少年漫画誌におけるラブコメのジャンルとして成立は、ラブコメ要素のある掲載作品が実質的に不在な状態から、恋愛とコメディの両要素を突然変異的にあわせ持った特定作品のヒットとそれに続く追随作品によって短期間のうちに生ずるという経過ではなく、1973年より恋愛を中心的内容にした作品が編集部による観測気球的意図をともなつて掲載されるようになり、その受容を踏まえて1978年よりコメディ要素をあわせ持つ作品が作られるようになり、1980年頃にジャンルとして送り手に認識される状況になるという、約7年間の過渡期を経て成立するという過程をたどった。
- ② 日本の少年漫画誌におけるラブコメのジャンルとしての成立に、作り手側の原理の中で中心的に与ったのは、ヒロインとなる女性キャラクターを作品の魅力の柱にして読者に訴求しようとする意図である。
- ③ 1980年代のラブコメブームを巻き起こしたとも現在謳われる『うる星やつら』と『タッチ』が、雑誌連載時においては編集部によりラブコメあるいは恋愛とコメディ要素をあわせ持つ作品としてアオリ文句に明示的にはアピールされていなかった。

た一方、『翔んだカップル』をはじめ、連載時より明示的にアピールしていた作品が複数、先行ないしは並行して存在し、それらが少年漫画誌においてラブコメを、複数作品にまたがるジャンルとしてとらえる見方を成立させた。

上記の仮説を検証する上で、元『週刊少年サンデー』編集者の岩本敏氏、元『週刊少年ジャンプ』編集長の後藤広喜氏、『The♥カボチャワイン』作者の三浦みつる氏、そして『さよなら三角』作者の原秀則氏に取材調査を行い、加えて『うる星やつら』『タッチ』『翔んだカップル』『胸さわぎの放課後』『The♥カボチャワイン』『さよなら三角』の6作品の雑誌連載時のアオリ文句について、雑誌掲載回の全数調査を行った。

結果、仮説①に掲げたラブコメの形成過程については、『週刊少年サンデー』における1970年代中頃の純愛漫画の掲載とあだち充作品の掲載をともに当時の同誌編集部による試験的試みに位置付ける岩本敏氏の見解が得られる一方で、漫画家の観点からは純愛漫画『愛と誠』とラブコメ漫画を不連続なものとする三浦みつる氏の見解もあり、検証には、編集部の原理と作家の原理とを分けた立論を要することが明らかとなった。また、編集部の原理に絞った場合でも、1970年代から1980年代にかけて様態がダイナミックに変化した『週刊少年サンデー』『週刊少年マガジン』『週刊少年ジャンプ』間の競合意識が、恋愛要素やラブコメ要素を持つ作に導入にあたって強力に働いていたことが岩本敏氏と後藤広喜氏の証言からうかがわれ、ラブコメの成立過程を史的に描き出すには、これを雑誌ごとに分けてとらえる必要があることがわかった。

仮説②に掲げた、ヒロインとなる女性キャラクターを作品の魅力の柱にして読者に訴求しようとする意図の介在については、岩本敏氏、三浦みつる氏、そして原秀則氏からこれを裏打ちする証言が得られ、1970年代末頃から1980年代前半にかけての『週刊少年サンデー』と『週刊少年マガジン』におけるラブコメ要素を持つ作品については成立すると考える。他方、後藤広喜氏からは明確に否定的な証言がなされ、同氏が編集部に在籍していた1970年から1993年の『週刊少年ジャンプ』については、漫画家側の意図については留保されるものの、編集部の意図としては否定された。

仮説③については、『うる星やつら』と『タッチ』については連載期間中終始恋愛とコメディ要素をあわせ持つ作品としてアオリ文句に明示的にはアピールされていなかった一方、先行ないしは並行して連載されていた『翔んだカップル』『胸さわぎの放課後』『The♥カボチャワイン』『さよなら三角』の4作品については連載時より明示的にアピー

ルしていたことが確認された。ただし、それら明示的にアピールされた作品の存在が少年漫画誌においてラブコメを、複数作品にまたがるジャンルとしてとらえる見方を成立させたといえるかどうかは、取材調査からは有効な判断材料が得られなかった。

付記すれば、三浦みつる氏と原秀則氏の証言からは、『The♥カボチャワイン』と『さよなら三角』が連載開始された 1981 年初頭の前には、『週刊少年マガジン』と『週刊少年サンデー』の両編集部において、すでにラブコメが踏襲に値する「路線」として認識されていたことが明らかとなった。また、三浦みつる氏からは、1980 年代前半のアイドルブームが少年漫画の読まれ方や作られ方を大きく変え、ラブコメ作品が作られ受容される基盤になったとする見解が示された。